

[作品発表]

グループ展「3DK」 — グラフィックデザインによる地域活性化 —

The group exhibition "3DK" : Revitalizing the community through graphic design

西 口 顕 一
Nishiguchi Kenichi

1. はじめに

大分県大分市内における空き店舗の活用と商店街の賑わい創出、また個人で制作した作品発表を目的としたグループ展「3DK Exhibition」を企画開催した。本企画は、2019年に開催したグループ展から2回目となる取り組みである。

展示会場は、大分市中央町ガレリア竹町商店街にある布屋ビル別館とした。布屋ビルは2021年に50周年を迎えた雑居ビルで、先代オーナーは「布屋」を店名として別府の竹細工等の大分の工芸品を販売していた歴史を持つ。現在はご子息がビルを引き継ぎ、1・2階をテナントとして貸し出しており、一部老朽化により使用できない部屋もあるが、昔ながらの古ビルに価値や意義を見出し、純喫茶や洋菓子店、裁縫サロンなどがテナントに入っている。今回、別館の一部屋が新店舗開業に向けた改装工事に入る為、その間の利用に快諾を頂き、展覧会の会場として期間限定で借りることができた。

2. 展覧会について

グループ展「3DK Exhibition」を、2021年7月31日(日)～8月29日(日)間の土・日・月曜日みのみの11時～18時迄で開催した。当展の参加メンバーは、筆者以外に、JAGDA大分(公益社団法人 日本グラフィックデザイン協会)に所属する大分市在住のグラフィックデザイナー・矢野哲義氏とイラストレーター・米村知倫氏の2名である。展覧会タイトルは、空きスペースの間取りが「3DK」であった事、また「3人の・デザイナーによる・夏季展」の頭文字を取って名付けた。

通常、グラフィックデザイナー(アートディレクター)の仕事はクライアントからの受注による制作が大半を占めるが、それ以外のアートワークを含めたアウトプットや、新たな実験的表現の発表の場として企画した。また、コロナ禍でイベントや展覧会の多くが中止を余儀なくされるなかで、個人主体の展覧会実施のあり方を検証する意味合いも含めている。展示に加えてワークショップ等も企画していたが、状況を鑑みて一部の開催とし、基本は展示のみとした。

3. 作品について

今回の展示会のために制作した新作4点と、布屋ビルに因んだグラフィックポスター（参加デザイナー3名の共通テーマ）に加え、昨年度制作し、東京都港区南青山にあるSPIRAL主催の展覧会「SIFC21」に出品したグラフィックポスター3点及び、小型グラフィック作品を展示した。以下、新作について述べる。

3.1. 「soap bubble」(4点) について

「視覚の欠片」をテーマとしたグラフィック作品である。視覚伝達デザインの分野では、他者との共通意識の観点から造形を作り出し、色彩（配色）を選択する事が多いが、筆者が日常的にインプットしている様々な視覚情報の中で、商業目的にはアウトプットする事が少ない、造形の魅力や美しさを重視した実験的な視覚表現である。シャボン玉が球体を形成する直前の造形の面白さや浮遊感を切り取り、4点の作品で表現した。

制作工程として、まず実際に屋内外でシャボン玉を作り、静止画や動画で撮影したものを画像素材として用いたが（図1・2）、リアリティはあるものの、周囲の写り込みや光の反射が、作品として目指すイメージとは異なった。よって、検討の結果3DCGに精通している本学デザイン専攻メディアデザインコースの鈴木慎一教授に協力を仰ぎ、サンプル画像を元に原型となる造形制作を行った（図3）。理想に近い形状と立体感、反射の程度等に到達する為、何度かやり取りを繰り返し、シャボン玉のテイストを決定した（図4）。その後4つの異なる造形に展開し、画像データを元に色彩や画像加工、レイアウト等を行った。

印刷については、本学デザイン専攻が所有するインクジェットプリンター EPSON・SC-P9550を用い、紙はインクジェット専用紙である、マット紙、キャンバス用紙、画材用紙で再現の比較検証を行った。マット紙は平滑で紙の素材感が薄く、平面的な仕上がりと became。キャンバス用紙は表面の凹凸が大きい分、造形の細部が分かりづらかった為、2点の中間的存在となる、素材感があり色彩の再現が最も理想に近い画材用紙を採用した。また、画材用紙にプリントする上で、よりグラフィックの透明感や色味の表情が出るようデータ調整を行い、Adobe Photoshopのフィルター加工によるノイズやスクラッチの密度を検証しながら、テスト印刷を経て仕上げに至った。（図5・6・7）



図1 屋外で撮影したシャボン玉



図2 スタジオで撮影したシャボン玉

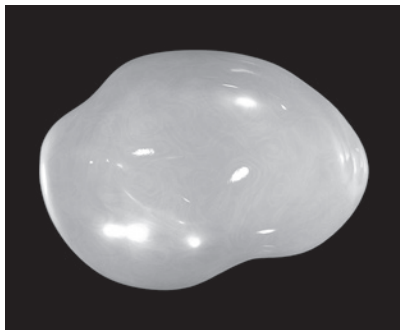


図3 3DCGで描き起こしたシャボン玉(一部)

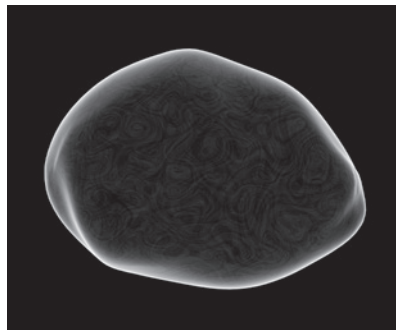


図4 ブラッシュアップされたシャボン玉

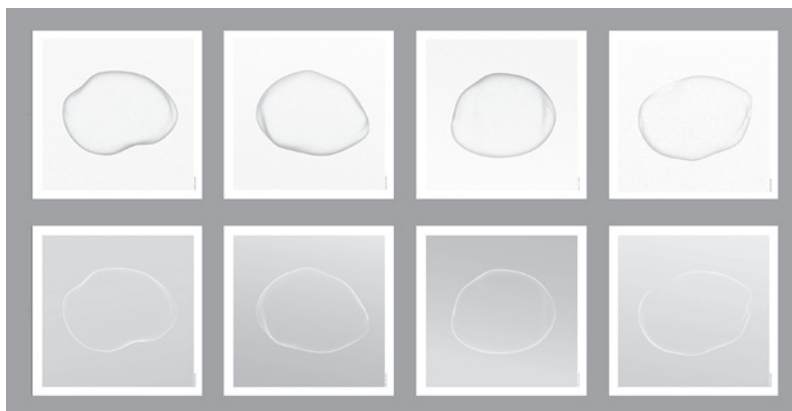


図5 完成した造形による作品展開「soap bubble」



図6 完成作品「soap bubble」
(4点) 壁面設置の様子

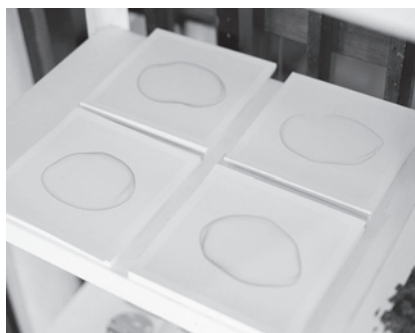


図7 完成作品「soap bubble」
(反転4点)の小型グラフィック

3.2.「布屋ビルポスター（共通テーマ）」について

展示にあたり、出展者3名で共通テーマによる作品を制作する事となり、ビルの認知を図る目的も兼ねて、展示会場となる「布屋ビル」をテーマとしたグラフィックポスターを制作した。そこで、会場下見の為にビルを視察した際、通路壁面で発見した民芸店当時の看板の手描き風書体と、ビルの図面を素材としてタイポグラフィポスターを制作した。こちらも本学のEPSON・SC-P9550を使用しプリントした。用紙はインクジェット専用紙で

はなく、紙の専門商社である（株）竹尾から発売されているマット系用紙¹⁾、光沢系用紙²⁾を使用してインクジェットプリンターによる普通紙プリントの検証を行った。

マット系用紙においては、共通してややエッジの滲みが感じられるが、モノトーンプリントでは許容範囲の再現性である。カラープリントについては、インクジェット専用紙に比べ発色が劣る。光沢系用紙は、特にパール調の用紙がインクを弾き、擦れを起こすなど定着しにくかった。また隣り合う色ベタで滲む傾向がある（図8・9）。モノトーンであればインクは乗るが、乾くまでかなりの時間を要し、クリアな再現を求める場合は適していない事が判明した。レーザープリンターではある程度精細に表現できる為、目的に応じて使い分けが必要である。今回のテーマには「古ビル」のイメージがあったため、滲みやインクの弾きを逆手に取り、パール調の用紙の中でも比較的仕上がりの状態が良かった「クラシコグロス ブラウン」を採用。上塗りニスでインクを定着させることで、偶然起こりうる色むらを活かした作品とした（図10）。図11及び図12は、完成した作品を展示した様子である。



図8 インクジェットプリントによるパール調用紙の滲み



図9 インクジェットプリントによるパール調用紙の擦れ



図10 採用した用紙「クラシコグロス ブラウン」のプリント



図11 完成作品「布屋ポスター」
(A1) 設置の様子



図12 3名による「布屋ポスター」

1) 色上質 白、タントY-8、NTラシャ スノーホワイト、アラベール-FSウルトラホワイト、ハーフェア コットン、Mr.A-Fスーパーホワイト、モデラトーンGAスノー

2) クラシコパールN片面 ホワイト、クラシコグロス パール、クラシコグロス ブラウン、コンケラー IR ゴールドダスト、シャインフェイス シルバー、スタードリーム-FS クリスタル、タスルーチェ 120SDH ハイパー W、TantKira タントキラK-9、New特レーブル輝き シルバー、ペルーラ・ラスター スノーホワイト

4. 展覧会の様子

展示会場は、元々住居として使われていた昭和風情が残る3DKの間取りをそのまま活かし、居間、台所、寝室、座敷等の壁面に作品を設置した。以下図13から図18では、作品設置空間と、会期中の様子を紹介する。



図13 展示作品「LINE」(B1)



図14 展示作品「BONSAI」(B2) (2点)



図15 作品設置場所



図16 会場の様子1



図17 会場の様子2



図18 会場の様子3

6. おわりに

今回は、コロナ禍における展示であった為、大々的な告知はせず、比較的長い期間に分散して来訪してもらう事を想定したが、来場者側もそういった事を意識した上で観覧いただいていたこともあり、大きな問題も無く会期を終えることができた。「空き店舗の活用



図19 展示会場布屋ビル別館
入り口（2F）



図20 展覧会告知DM3種の中の1点
（上：表面，下：宛名面）

と商店街の賑わい創出」の側面からは、街なかに詳しい人でも「初めて建物に入った」「商店街にこんなところがあったと知らなかった」「ビルの部屋を借りてみたい」などの声が多数寄せられ、来場者にビルオーナーを紹介する場面も多々あった。また、他の商店街関係者やリノベーション業者の方からも、「こういった取り組みが空き店舗や改装までの間に実施できると、空間を無駄にせず賑わいにつながるのではないかと、参考にした」との声や協力依頼があった。ご来場いただいた大分市美術館館長の菅章氏からは、取り組み内容とその意義について賛同いただき、大分合同新聞に菅氏の批評と共にグループ展の紹介記事を掲載していただいた。

作品発表の成果については、3.で述べた、SPIRAL主催の展覧会「SIFC21」の2021年度版「SIFC22」にて、「SIFC21」出品者のピックアップアーティスト3名の中に選ばれ、「SIFC22」の会期中に、今回の作品を展示販売することができた。また、活版印刷を行う会社から作品や取り組みに興味を持っていただき、新サービスのモニターとして共同で印刷技術を活用した作品制作を行うことが決定している。また、本学のインクジェットプリンターを活用した検証を実施した事で、自身の今後の作品展開だけでなく、本学ビジュアルデザインコース学生の卒業制作・修了研究のフィニッシュワークにおいても有効となる試作であった為、ポスターやパッケージデザイン、その他プリントツールにおいて、指導のサンプルとしたい。

今回のグループ展で視覚伝達デザイン分野の同業者と企画や意見交換ができた事、第三者に作品を観てもらい、客観的意見や忌憚のない感想をもらえた事、何よりコロナ禍において、対面で人と対話する事の大切さを実感した展示会であった。街なかの賑わい創出のみならず、芸術振興、中でもデザインに関する分野理解や情報発信の為、継続的に実施して行きたい。